令和7年９月1 日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12 日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2025 9月号 no.580

出会う・つながる ボランティアセンター

～協働で広げる顔の見える関係～

関係機関と連携し、住民が講師のイベントを VC 内のカフェで開催

和歌山県　御坊（ごぼう）市社会福祉協議会

TUNAGARU(つながる) カフェ

人と人とが交流し、つながる場として TUNAGARU(つながる) カフェを開設しています。(月～金曜日　9：00 ～ 16：00)

TUNAGARU(つながる) マーケット

- **品物を提供する人と購入する人のつながりの場。カフェに常設しています。**

TUNAGARU(つながる) イベント

- **小学生を対象に、高校生による宿題サポート「夏休み宿題カフェ」やアイロンビーズ、昔の遊び体験。「秋のつながるバイオリンコンサート」、「春を楽しむつながるお茶会」などをカフェで行っています。**

御坊市社会福祉協議会では、2023年４月にボランティアセンター室内に「TUNAGARU カフェ」を開設しました。カフェでは、社会参加やボランティア、参加者同士のつながりを促すイベントを企画・実施しています。

小学生を対象としたアイロンビーズ教室では、市直営の地域包括支援センター（以下、包括）と連携し、精神疾患のある方にボランティアの講師としてご協力いただきました。きっかけは、包括より、その方の作品をカフェに展示できないかというお話をいただいたことです。当初、支援者の間では講師が務まるかどうか不安もありましたが、ご本人に確認したところ、少し迷った末に「やってみたい」と話されたため、その思いを大切にし、包括や障害者総合相談センターの担当者が間に入って打ち合わせを行い、無事に開催することができました。

ボランティア担当として私が大切にしているのは、ボランティア一人ひとりの思いを尊重することです。ボランティア活動が「楽しい」「やりがいがある」と感じていただけるよう、ご本人や関係機関との打ち合わせは丁寧に行うよう心がけています。

今年の夏休みには、企業や学生と連携したイベントも企画しています。TUNAGARU カフェを拠点に、人と人とのつながりがさらに広がるよう、イベントを企画・実施していきます。

今月の表紙執筆者

御坊市社会福祉協議会
ボランティアセンター担当
望月（もちづき） 翔太（しょうた）さん（左）
TUNAGARU カフェ担当
北野（きたの） 裕子（ゆうこ）さん（右）

Contents

P.2▶ 特集 ボランティアをもっと身近に！ ～気軽に話せる・集える場をつくる～
P.6▶ VC のありかた　取り組みのヒント
P.7▶ 福祉教育　わたしたちの実践
P.8▶ 地域支え合いセンターってどんなところ？ ｜ インフォメーション

ふれあいネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

ボランティアをもっと身近に！
～気軽に話せる・集える場をつくる～

ボランティアセンター（以下、VC）には、地域のさまざまな人や情報が集まる仕組みや工夫が求められます。そこで、ボランティア活動をしたい方、ボランティアに助けてほしい方はもちろんのこと、地域住民が気軽に立ち寄れる場をつくっている VC があります。本特集では、そうした取り組みのなかからふたつの事例を紹介し、VC として気軽に集える場があることの意味と、場づくりへの挑戦・工夫を学びます。

事例 1

おしゃべりしたい人が気軽に集う移動カフェ
住民・コーディネーター双方からの「相談」で地域活動をつくる

兵庫県　宝塚市社会福祉協議会

左から西さん、大関さん、藤原さん

宝塚市は兵庫県南東部に位置し、市域は南北に細長く、住宅地が広がる南部市街地と、豊かな自然に囲まれた北部田園地域からなります。人口は約 22 万人で、世帯数は約９万 7,000。小学校区ごとにまちづくり協議会があり、地域活動をしています。

宝塚市社会福祉協議会（以下、市社協）のボランティアセンターは 2022（令和 4）年７月から「宝塚ボランタリープラザ zukavo(ヅカボ)」（以下、zukavo）に改称。ボランティアグループやセルフヘルプグループの立ち上げ・運営を支援し、多様な地域住民がボランティア・市民活動を通じて社会参加することを支えています。

宝塚ボランタリープラザ zukavo

所長　大関（おおぜき） 可奈子（かなこ）さん

ボランティアコーディネーター　西（にし） 真紀子（まきこ）さん、藤原（ふじはら）　綾子（あやこ）さん

ボランティアコーディネーターがアウトリーチする移動カフェ

zukavo は 2019 年から、ボランティアコーディネーター（以下、VCo）３名が市内の複数拠点に出向き、予約不要の相談会「ボラコ移動カフェ」を開催しています。「もともとは、zukavo の事務所内でボランティア相談会を開催していましたが、なかなか足を運んでもらえないということがありました。そこで、こちらから出ていけばいいのではという発想から、移動カフェを始めました」と大関さんは振り返ります。

ところが順風満帆とはいきません。公民館などいろいろな場所で不定期に開催してみたものの、なかなか人が集まらなかったとのこと。そこで固定の場所・時間で開催することになりました。試行錯誤を経て、現在は市内４か所で開催しています。

それぞれ特徴の異なる 4 か所を移動カフェの拠点に

開催拠点の１か所めが「一小（いっしょう） 宝梅（ほうばい）ハウス」です。一小宝梅ハウスでは、定期的に高齢者の集まるサロンが開催されており、毎月第４水曜日をボラコ移動カフェの日としてきました（今年の９月からは偶数月第４水曜日に変更）。一小宝梅ハウスは、大関さんが zukavo の担当になる前、コミュニティワーカーとして関わっていました。「地域の人が、地域のことを、地域で考え話し合う場を」と始めた場に zukavo の VCo が訪れることで、地域の活動者の視野やネットワークがさらに広がると考え、移動カフェの拠点としました。

２か所めは、商業施設内にある買い物ができるデイサービスセンター「ひかりサロン」です。デイサービスの入口にあるカウンターの活用方法について市社協に相談が来たのをきっかけに、ひかりサロンで移動カフェを実施することになりました。ひかりサロンの移動カフェには、VCo だけでなく、市社協の地区担当やケアマネジャーなどの専門職も同席し、介護などの話題になった際にも相談に応じられるようにしています。現在は奇数月の第４金曜日に開催しています。

３か所めの「あくらす」はスーパーの２階で、「街の人が年齢に関係なく集える場を」と地域の活動者がカフェやチャリティーショップなどを開いて

助成金情報

（公財）SOMPO 福祉財団　NPO 基盤強化資金助成「認定 NPO 法人取得資金助成」（2025 年 10 月３日締切）

地域の中核となり、持続的に活動する質の高い NPO 法人づくりを支援し、「認定 NPO 法人」の取得に必要な資金を助成します。（詳細は「SOMPO 福祉財団　助成」で検索）

移動カフェのスタート地点である一小宝梅ハウス

ひかりサロンのカウンターではボランティア相談に来た住民がほかの住民の介護の相談に乗る場面も

ラ・ビスタよりあい広場では地域の今昔の話が聞こえてくる

無料で提供するコーヒーは種類をたくさん用意し話のタネに

いるスペースです。小さな子どもが遊べるコーナーもあるため幅広い年齢層の方が訪れており、zukavo もそこへ合流するスタイルで移動カフェを月１回設けています。

そして４か所め「ラ・ビスタよりあい広場」は、大規模マンション内の商業スペースにあり、生活支援や居場所づくりといったマンションの住民のネットワーク「ささえ愛ネット」の拠点となっています。マンションの住民が、別の場所で開催されていた移動カフェを見て、「うちにも来てよ」と zukavo の VCo を誘いました。かねてから zukavo と関わりのあったささえ愛ネットのメンバーの協力もあり、移動カフェの拠点となりました。現在は奇数月第３水曜日の開催です。

「選べる」「カフェ」ならでは相談しやすさを実現

移動カフェでは、くつろいで気軽に話ができるようにコーヒーを無料で提供しています。zukavo が心がけているのは、「ボランティアについて聞きたい方や誰かとお話したい方はどなたでもお越しください！」と広報し、「福祉」の相談窓口の雰囲気をあえて消すこと。悩みごとを抱えている人として見られるのではないかという立ち寄りにくさへの配慮です。「何気ない世間話から心を開いて、ご家族の入院や障害についての話が出てくることもあります」と藤原さんが言うように、話すことを無理強いしないカフェスタイルが、来る人の「話したい」という気持ちにつながります。話の内容によっては市社協の他部署につなぐなど、zukavo にとどまらない支援の糸口にもなっています。

移動カフェならではのよさを、zukavo の職員たちは次のように語ります。

まずは、住民が行きたい場所を選べること。近くだと行きやすいと考える人もいれば、自宅から遠いところをあえて選びたい人もいるからです。

次に、活動者が相談しやすいこと。サロンなどすでに地域住民が集まって活動しているところに設置しているので、ボランティア活動をしている方から相談を受けることが少なくありません。定期的に地域に出向くことで、相談しやすい環境を実現しています。

そして、一般的なカフェだと思って訪れてくる人がいること。ある拠点では、そうして訪れた地域住民に VCo がボランティア活動を紹介すると、定期的に活動に参加するようになったという事例もあります。移動カフェに来た人には zukavo 公式 LINE への登録を促すなど、つながりが途切れないように工夫しています。

地域住民と一緒に話し合い困りごとの解決策を考える

zukavo の職員が口をそろえて話すのは、移動カフェで各地に出向くと、地域のことがわかるということです。西さんは、「こんな人がいてこんな活動があるんだ、というのを目の当たりにでき、地域の活動者とつながれました。また、会話のなかで地域生活課題も聞こえてきます」と話します。

zukavo からの働きかけも大切にしています。大関さんは「地域の方にも、地域で起こっていることを伝えていきたい」と語ります。ボランティアに関心をもたずに来た人に対しても「実はこの地域にこういうことで困っている人がいて…」と相談し、一緒に考えてもらうよう意識しているといいます。

例えば、コロナ禍の際に、障害のある地域住民から「ヘルパーさんが来られず買い物にも行けない」といった悩みを聞いた VCo は、その当事者の地元で開催した移動カフェで、「この地域にはこういう困りごとを抱えている人がいて、どうしたらいいかな」と問いかけました。すると、「買い物くらいだったら私たちが行くよ」という地域住民が。その方は、買い物を手伝ううちに、「自分もサロンに行ってみたい」という障害当事者の声を聞き、送迎を手伝うようにもなりました。

「VCo にとって、地域住民と互いに相談できる関係を築くことが大切。移動カフェを通じて、その直接的な関係が築けてきているように思います」と大関さんはいいます。地域住民とともに活動を考える場をつくることをめざす zukavo にとって、移動カフェはその一翼を担う重要な機会となっています。

助成金情報

（公財）SOMPO 福祉財団　NPO 基盤強化資金助成「組織および事業活動の強化資金助成」（2025 年 10 月 3 日締切）

NPO の基盤強化となる「組織の強化」と「事業活動の強化」に必要な資金を助成します。西日本地区に所在する団体が対象です。（詳細は「SOMPO 福祉財団　助成」で検索）

事例 2

地区のニーズと地元ボランティアをコーディネート 地区社協とボランティアグループとの連携で実行力のある地区 VC に

神奈川県　横浜市港北区 新吉田地区社会福祉協議会

新吉田地区社協のみなさんと区社協職員

横浜市港北区内には 13 の地区があり、新吉田地区は北西に位置しています。果樹園などの農家や町工場などの町並みと区画整理された住宅地やマンションの多いエリアが隣接し、古くから地域に暮らしてきた人々と、核家族、独居などの人々が混在するエリアでもあります。そうしたなか、「やすらぎの家」は港北区社会福祉協議会ボランティアセンター（以下、区社協 VC）のブランチとして生まれました。地区社協の活動拠点にもなっているほか、地区社協が主催する活動の受付窓口として、また、地域住民が気軽に立ち寄れる居場所としても機能しています。

新吉田地区社会福祉協議会　会長　宮田 房子さん、副会長　吉田 政夫さん、副会長　山田 享子さん、事務局長　藤岡 圭子さん、金田 友美さん、堀内 みゆきさん、西 仁美さん、加藤 晴美さん、木浪 みゆきさん、麻生　新さん

横浜市港北区社会福祉協議会　ボランティアセンター担当　牧野 大樹さん
新吉田地区担当　天倉 梨那さん

地区社協を中心に地域住民の力で困りごとを解決する拠点

「やすらぎの家」は最も身近にある地区 VC として、ボランティアを求める人とボランティア活動をしたい人をつなぐ役割を果たしてきました。その成り立ちは今から約 20 年前に遡ります。

それは横浜市港北区の第一期地域福祉保健計画（2006 年）策定に向けた時期。2005 年、新吉田地区で登録制のボランティアグループ「ほっと新吉田」が立ち上がりました。地域住民の高齢化や独居化が進むなか、「日常生活を支えるボランティアグループをつくろう」と考えたことがきっかけでした。

「ほっと新吉田」の発足からしばらく経ったころ、新吉田地区にあった区役所派出所が閉鎖されることになり、建物の二次利用の検討が始まりました。そこで港北区社会福祉協議会（以下、区社協）が区社協 VC の西部ブランチとして利用することを提案。区社協 VC は区の東側に位置しており、当時、西側住民がアクセスしづらいという課題がありました。話し合いを重ね、同建物を地区社協と区社協が協働で運営する地区 VC「やすらぎの家」として 2007 年に開所することになりました。

「当時の議事録を改めて調べたところ、新吉田地区のなかで福祉の重要性の認識や、ボランティアの気運が高まってきた時だったことがわかりました。そのため、運営は地区社協の皆さんに担ってもらい、地区社協事務所としての機能や地域住民の居場所としての機能も兼ねてもらえたら、という発想のようでした」と区社協の牧野さんは話します。

誰でも気兼ねなく相談できる体制と区社協 VC のバックアップ

発足から約 1 年間は地区 VC としての基本的な機能を形づくるために区社協 VC コーディネーターが開館日に合わせて常駐し、地域住民から相談があった際の対応方法などの枠組みを整えてきましたが、その後は地区社協中心で運営とコーディネートをしています。現在は毎週月・水・金曜日の 10 時～ 15 時に開館し、交代で当番を置いています。

「相談の有無にかかわらず、いつも決まった曜日、時間に開いていて、地域の人がふらっと気軽に立ち寄れる雰囲気にしておくことを大切にしています。一緒にお茶を飲みながら何気ない会話を交わすなかで、自然に悩みなどがこぼれるケースが少なくありません」と事務局長の藤岡さんは言います。

新人が当番になる場合は、ベテランを一緒に配置するといった工夫も。当番をできるだけ負担に感じないよう、皆でフォローし合う体制を心がけています。また月に一度は全員が顔を合わせる運営会議を実施、2 か月に一度は区社協職員やケアプラザの職員も同席し、互いの情報交換、連携が図られています。

成り立ちからもわかるように、「やすらぎの家」と「ほっと新吉田」は切り離せない関係にあります。ほっと新吉田には現在、約 60 名のボランティアが登録。やすらぎの家に寄せられた相談のうち、地区のなかで解決できそうなことはほっと新吉田へつなぎます。

「たとえば庭の草むしりをしてほしい、といった相談があった場合、まずはボランティアコーディネーターと当該地区担当の民生委員・児童委員が一緒に家庭を訪問します。本当に支援が

助成金情報

（公財）齋藤茂昭記念財団「2025 年度 助成事業」（2025 年 10 月 15 日締切）

障害者、発達障害、LGBTQ をはじめとする社会的マイノリティの能力発揮と QOL の向上に向けて、支援活動を行う団体および個人に対して助成を行います。（詳細は「齋藤茂昭記念財団　助成」で検索）

必要かを判断したうえで、庭の広さなどを確認し、必要な人数や所要時間を算定、適切なボランティアへとつなぎます」と、ほっと新吉田代表でもある西さんはいいます。

民生委員・児童委員が一緒に行くのは、相談者に安心してもらうため。１件１件の相談について、ここまで丁寧な対応をしてきたからこそ、やすらぎの家とほっと新吉田、地域住民とボランティア間の強い信頼関係が築かれました。

「地区のなかだけでは解決できない相談があった時には、遠慮なく区社協VCにつなぐようにしています」と藤岡さん。いざという時、区社協がしっかりバックアップする体制があるからこそ、安心して地区社協の人たちがVCの運営を担えているようです。

大切なのは数ではなく一人ひとりと丁寧に向き合う姿勢

ボランティアを「求めている人」と「したい人」をつなぐ。言葉にするとシンプルですが、実際にはどのように活動を継続させてきたのでしょうか？藤岡さんは次のように話します。

「やすらぎの家はミツバチのような活動ではなくクモの巣のような活動だよ、とメンバーには説明しています。ミツバチのように困りごとを外に探しに行くのではなく、ここを拠点として相談に来る人を受け入れサポートを届けていく、という意味合いです。ボランティアコーディネートをしている私たちはそれを生業とするプロではありません。地域の住民にとって近い存在だからこそ、大きく身構えずに活動できます」

宮田会長は、「マッチングの数を重視するのではなく、『つないでくれて本当に助かったよ』と言ってくれる人が１年にひとりでもいれば成果としてよし。気負わずに、気長に活動してきたことが、これまで長く続けてこられた理由だと思います」と語ります。

しかし、相談者が訪ねて来るのをただ待っているわけではありません。やすらぎの家の運営には現役の民生委員・児童委員やその経験者たちもかかわっています。ふだんから住民の悩みごとや相談ごとに接してきた人たちであり、どの地域にどんな人が暮らしているのか、どんな課題を抱えているのかといった情報にアンテナを張っています。やすらぎの家は、それぞれの民生委員・児童委員が把握した困りごとについてOB・OGたちと話し合える場にもなっており、それが運営メンバーにとっての魅力にもつながっています。

「コアな情報も外に漏らさずに話し合える場所があるのはメリット。この場所があったからこそ、活動を続けてこられた」と地区社協の皆さんは口をそろえて言います。

地域の人とふれあい交流する活動がVCの認知度と信頼を高める

ボランティアコーディネート以外に、さまざまな交流・体験活動を開催しているのもやすらぎの家の特徴です。

毎年夏休みには子どもたちを対象とした福祉教育の体験事業や、３月には1,000人規模の地域住民が集う「ふれあい動物園」、秋には「畑の収穫体験会」と年間を通してさまざまなイベントを催しています。その受付窓口となっているのもやすらぎの家。その目的は福祉に対する意識を高め、次の担い手を育てることにあります。また、イベントをきっかけに地域住民と接する機会を増やし、見えにくい課題をすくいあげるねらいも。こうした精力的な活動があるからこそ、「クモの巣型」の活動が機能しています。

さらに昨年度からは新しく子ども食堂「もぐもぐキッチンしんよしだ」もスタート。子どもたちと一緒に料理をつくり、みんなで食べ、片づけまで行う活動を毎月２回開催しています。「日ごろから見守っている子どもがさつまいもを持って『これ食べたい…』と声をかけてきたことがありました。また学校関係者からも『学校給食を食べられない夏休みに痩せてしまう子どもがいる』という相談もあり、これは何かしなければならないと感じました」と、主任児童委員であり、学校で支援員も務める金田さんは振り返ります。それまで地区社協では子ども食堂や食支援など食をともなう活動を開催したことがありませんでしたが、課題意識と熱意を共有し、実施に至りました。

やすらぎの家は約18年もの間地区VCを運営し、多くの人に知られる存在となりました。

「やすらぎの家はボランティアの相談に限らずいろいろな相談を、安心・信頼して寄せられる場になっています。『こんな時はどうしよう？』という課題について区社協も一緒に悩み、考え、気づき、学び合っています」と牧野さんは話します。地域の課題把握に努め、新しい意見も取り入れながら果敢にチャレンジしてきた姿勢によって、やすらぎの家は区社協VCブランチと地域の居場所のふたつの機能を果たしています。

やすらぎの家は地区センターの隣に位置している

地区VC運営会議の様子

夏休み福祉体験「アイマスクをつけてホットケーキを作ってみよう」

助成金情報

（公財）コメリ緑育成財団　「第36回コメリ緑資金助成」（2025年10月24日、10月31日締切）

あなたの街の緑化活動、自然環境保全活動を応援します。助成対象となる活動場所は、A. 原生の状態を維持している山林など、B. 原生的な自然と都市の中間に位置する里地里山など、C. 都市の緑地帯など。（詳細は「コメリ緑育成財団　助成」で検索）

第6回

VCのありかた 取り組みのヒント

全国ボランティア・市民活動振興センターが策定した「市区町村社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター強化方策 2023 ～社協 VC5 つの役割と 25 の視点～」（以下、強化方策 2023）は、社協 VC の基本的な役割や、現状を自己評価するチェックリスト、取り組みを具体化するための視点等を掲載しています。本連載ではチェックリストの紹介を通して、ボランティア・市民活動を推進するための気づきと取り組みを応援します。

今月のチェック項目

2　社会参加の促進：あらゆる人たちの社会参加を応援する

（5）ボランティア活動を通じて、ボランティアをしたい人、ボランティアに支援を求めている人双方に、出会い、学び、協働のきっかけを提供しているか

解説

地域人財をつなぎ、バックアップする

社協 VC にはさまざまな思いや背景をもった地域住民が日常的に集い、顔の見える関係を通して情報が行き来します。そのなかで、ボランティアをしたい人、ボランティアの支援を求めている人の双方に、気づきや学び、そして協働の芽が生まれます。社協 VC は、こうした出会いの場を提供し、協働をすすめることで、地域で活躍する人財を発掘してつなぎ、重層的なボランティア・市民活動の輪を広げていくことができます。

さらに、地域生活課題の解決に向けた連携やプログラム提案等、マネジメントができる人財を計画的に養成するという視点からも、社協 VC 職員だけでなく、地域で活躍している、または、今後活躍が期待される多様な人財のネットワークに目を向けることが大切です。こうした人々と積極的な交流を図り、協働のあり方を模索することで、ボランティア・市民活動がもつ強みと地域の助け合いの精神とをつなぎ、互いを活かし、地域生活課題を解決することが求められます。

事例

一歩を踏み出したい人に 多彩な活動メニューで後押し

東京都・港区社会福祉協議会（以下、区社協）VC では、2016 年から「地域福祉活動・ボランティア活動　パワーアップ塾」を開催しています。地域で活動してみたいと思っている人のスタートを後押しすることが目的で、今年度も「あなたの活動のきっかけをつくろう！」をテーマに募集し、学生からシニアまで幅広い世代が参加しています。

パワーアップ塾はおよそ半年間のプログラムで、必須プログラムと選択プログラムがあります。オリエンテーションに始まり、中間報告会、まとめの会の３つの必須プログラムがあります。その合間にボランティア団体をゲストに、活動紹介やプチ体験、交流を図るオリジナル講座や、サロンづくりの講座などさまざまな選択プログラムがあり、受講者は関心のある活動を選びます。

修了後は、区社協 VC にボランティアとして登録し活動を続けられる方が多く、先輩ボランティアとしてパワーアップ塾にも登壇しています。また修了生と受講者による交流会は、つながりや活動の幅を広げる機会となっています。区社協 VC では、受講者（修了者を含め）にさまざまな活動情報を発信し、継続的な参加を働きかけています。

〈取り組みのヒント〉

- めざすべき地域人財像を示すことで、VC として何を支援すればよいかが明確となる。
- 活動者が活動に対する意見・要望を出し、その対応策を検討することで、相互に気づきをもち、次の活動につなげることができる。
- 活動後に受け入れ先からの評価をもらい、それらをフィードバックすることで、活動について考えるきっかけとなる。また、社協 VC には個別事例が蓄積され、普遍化した支援方法の確立ができる。
- 学習にあたっては、一方向での座学研修だけでなく、活動者の現場を訪問したり、実際の活動を体験する方法が効果的である。

CHECK!

強化方策はここから ダウンロードできます

「ボランティア・市民活動推進情報ページ」
https://www.zcwvc.net/volunteer/reference/zenshakyo-vc/
（全社協 VC 強化方策 2023 で検索）

助成金情報

（公財）日工組社会安全研究財団　「2026 年度　安全事業に関する助成」（2025 年 10 月 31 日締切）

人々が犯罪と関わりなく安全かつ安心して生活できる社会の実現をめざし、同じ目的をもつ団体の活動を助成により支援いたします。助成は、犯罪の予防活動を中心に少年非行防止・被害者支援等の活動を対象とします。（詳細は「日工組社会安全研究財団　助成」で検索）

福祉教育　わたしたちの実践

～つながる、広がる、福祉教育～

ともに生きる力を育む福祉教育の実践には、地域住民や関係機関・団体との“協同”が不可欠です。そこで本連載では、協力者（地域住民や関係機関・団体など）とのつながりに着目し、福祉教育実践者が「協同実践」のヒントを得られるよう、全国各地の福祉教育実践を取り上げます。

地域に出て、困っている人の困りごとを体感し店舗の使いやすさの改善につなげる

新潟県・佐渡市社会福祉協議会　福祉課　課長補佐　中川（なかがわ）敏也（としや）さん
福祉課　地域福祉係　主任　福井（ふくい）智也（ともや）さん

（左から）
中川さん、福井さん

近隣店舗を使って体験学習を実施 新たな発見に気づく

佐渡市社会福祉協議会（以下、市社協）は、学校や企業、自治会等を対象とする福祉教育出前講座に取り組んでいます。2020 年、県立羽茂（はもち）高校は、地域探究コースを新設し、地域の諸課題を発見しその解決策を検討する等の特色ある取り組み行っています。３年次より選択可能な「生活と福祉」という科目において、福祉に対する理解をより深めるためには、専門職による実践的な授業が必要だと感じ、授業担当の教師が市社協に相談。2022 年から市社協の出前講座を活用した校外での体験学習を開始しています。

対象は「生活と福祉」を履修する３年生です。高齢者疑似体験と車いす体験を別日程で実施します。体験学習の事前説明は、市社協との打ち合わせで福祉教育の意義や意図を理解した教師が担当。生徒は事前に問題点や危険箇所を想定し、学校から店舗まで移動して買い物を行います。現金での支払いをあえて選び、小銭のつかみにくさや飲料の開けにくさも体感します。

体験後は学校に戻り、予想との違いを個人･グループでリフレクションし、レポートにまとめて共有します。体験では「大変」「動かしにくい」といった声があがりますが、同行する市社協職員は「できないことより、できることを探してほしい」と促しています。

体験学習をきっかけに 店舗が高齢者の生活支援に参画

こうした地域での授業が可能なのは、学校からわずか 150m の場所にあるウエルシア佐渡羽茂店の協力のおかげです。ウエルシアホールディングスの池野隆光会長は社会貢献活動に関心があり、市社協を訪問した際に協力を申し出てくれました。

ウエルシアで高齢者疑似体験と車いす体験をした生徒から、「トイレに行く途中に棚や商品があり､通りにくい」という率直な意見が寄せられました。このフィードバックは店舗改善や社員のモチベーションアップにつながっているといいます。

また、ウエルシアは佐渡市と支え合いによる地域づくりに関する連携協定を締結しており、2023 年 10 月から移動販売車の運行も開始。市内各地で高齢者の社会参加・見守り・介護予防を支えています。

体験学習を通して 生徒が困りごとの改善策を提案

2024 年度は、同地域内にあるさくら薬局羽茂で体験学習を行いました。打ち合わせの際、その薬局では中学生の職業体験で擬似処方箋によるデモンストレーションを行っているとうかがい、同様のプログラムを取り入れることにしました。

この薬局では、生徒が「トイレに荷物を置く台が欲しい」と感想を伝えた結果、後日棚が設置されました。薬局側も、高齢者に対してどの程度の声の大きさで話せばよいかを理解できたといいます。

地域が生徒の体験学習に関わることは、多くの気づきを生みます。市社協では、教師と相談しながらできることを探し、自分ごとに引き寄せて考えるきっかけとなるよう、体験学習のさらなる発展をめざしています。

書籍紹介

『月刊福祉』2025 年 10 月号（全社協出版部）価格 1,170 円（本体 1,064 円）
特集は、「“ごちゃまぜ”の実践が生み出すもの」。今や共生型サービスや地域共生社会施策にもつながってきている“ごちゃまぜ”の実践。現在行われている取り組みや、背景にある思いを明らかにし、その意義とさらなる可能性を伝えます。

地域支え合いセンターってどんなところ？
～立ち上げ時の課題を知る～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携、協働が必要不可欠です。
本連載では、実際に災害 VC を運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第12回　石川県　七尾市社会福祉協議会

発災後の支援スキームの想定がスムーズな対応のカギ

石川県七尾市
社会福祉協議会
日下（くさか） さと恵（え）さん（左）
川﨑（かわさき） 晴美（はるみ）さん（右）

建設型仮設住宅に 1220 名が入居中 センターでは 2000 人の方を支援

８月号の本コーナーでは、令和６年能登半島地震において石川県全域に地域支え合いセンター（以下、センター）が設置され、今も運営が続いている現状を紹介しました。今月号では、七尾市社会福祉協議会（以下、市社協）がセンター開設時に直面した課題や、これまでの取り組みを紹介します。

令和６（2024）年１月１日に地震が発生し、３月には最初の建設型仮設住宅への入居が始まりました。建設型仮設住宅は次々に建設され、現在では 13 カ所 575 戸に計 1220 人が暮らしています。また、市営住宅や定住促進住宅にも計 77 世帯 180 人が入居しています。さらに、市内のみなし仮設住宅は 371 世帯あり、センターでは合計約 2000 人の方を対象に生活再建に向けた相談や支援を行っています。

アンケートで優先順位を決め、全戸訪問を迅速に実施

４月１日に地域支え合いセンターを開設しましたが、すぐに訪問を開始できたわけではありませんでした。市関係各課等との打ち合わせ、訪問方法の検討、帳票や物品の準備、被災者名簿の確認、記録方法の確立、県との連携など、多岐にわたる細かな準備や打ち合わせに追われたためです。すべて初めてのなかで、県社協や能登６市町の連絡会が効果的でした。わからないことを質問したり、具体的なアドバイスをいただけたことが、非常に心強かったです。日頃から近隣の社協との連携や、顔の見えるネットワークが構築されていれば、さらにスムーズな活動が可能だったかもしれません。

地域支え合いセンターの対象者は、建設型応急住宅の入居者に限らず、賃貸型仮設住宅や市営住宅等へ緊急入居された方も含まれます。限られた職員数で多くの被災世帯を訪問する必要があったため、建設型応急住宅以外ではまずアンケート調査を実施し、緊急性の高い世帯から優先的に訪問を開始しました。

被災者の孤立防止策として、自治会形成への支援や、交流の場としてのカフェを立ち上げました。現在では、ほぼすべての仮設住宅でカフェが開催されるようになり、住民の方々の楽しみの一つとなっています。被災者同士のつながりや居場所の重要性を改めて実感しました。

どの職員もあらゆる業務に対応できる体制が重要 業務マニュアル整備が不可欠

社協としては、災害ボランティアセンターの運営や通常業務と並行し、地域支え合いセンターの開設・運営にも取り組みました。職員自身も被災者であるなか、どの職員でもあらゆる業務に対応できる体制の構築が重要であることを痛感するとともに、業務マニュアル整備も不可欠だと強く感じました。

大規模震災後には多岐にわたる支援が展開されます。平時から、震災後の支援事業の全体像を把握し、どの事業をどのように連携させるか、どのようなスキームで実施するかを想定しておくことで、いかなる災害においても焦らずに対応できたのではないかと、改めて強く感じています。

応急仮設住宅でのカフェの様子

インフォメーション

福祉教育推進員養成研修テキストのご案内

『福祉教育の理論と実践方法　～共に生きる力を育むために～』

全社協全国ボランティア・市民活動振興センターが開催する「全国福祉教育推進員研修」のテキストを、社会福祉協議会役職員のみなさんをはじめ、学校教員や地域で福祉教育に関わるみなさんに向けて販売しています。福祉教育を体系的に理解し、現在の最新動向も身につけながら地域での取り組みにつなげることができる本書をぜひご活用ください！

購入は、ボランティア・市民活動推進情報ページ で検索　3. 福祉教育推進関係情報>（2）全社協 全国ボランティア・市民活動振興センターの福祉教育関係資料　とすすみ、HP に掲載の申込書に記入のうえ、お申し込みください

ボランティア情報 2025 no 580
社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980　東京都千代田区霞が関 3-3-2　新霞が関ビル　TEL.03-3581-4656　FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp　URL https://www.zcwvc.net/
発行人●池上 実　編集人●高橋 良太　制作●株式会社丸井工文社　定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む